

ごあいさつ

沖縄県立宜野座高等学校のホームページへようこそおいでくださいました。

本校は、沖縄戦直後の生活環境も十分でないなか、「教育が何よりも大事である」とする地域住民の声を受け、昭和 21 年 2 月 11 日に産声を上げました。そのときの地域住民の気持ちに思いを馳せると、沖縄の未来を担う子ども達に 1 日でも早く高校での学びを提供したいという気持ちがあったのではないかと思います。しかし、教科書や教材も乏しく、404 名の生徒たちの学校生活は、もしかしたら学校づくりから始まったことと思います。以来、地域に支えられ、地域に根ざした高等学校として成長してきました。金武・宜野座・名護東岸地区の人材育成の拠点として「学習は専心を尚（たつと）ぶ」「運動は快心を尚ぶ」「交友は純心を尚ぶ」の 3 つの校訓の下、令和 8 年で創立 80 周年になりました。東に太平洋を、西にはガラマン山系を望む風光明媚で豊かな自然に囲まれた環境の中で文武両道を理念とした教育活動を展開し、これまで多くの優秀な人材を輩出してまいりました。

長い歴史の 1 ページには様々な場面がありました。

沖縄が本土に復帰する前、1964 年 10 月、全校生徒が校門前に集まり、一つの灯火を待っていました。東京オリンピックの聖火ランナーが漢那から本校へそして松田へと走り抜けていきます。今か今かと待ちわびる生徒の視線は一点を見つめています。拍手のなかやってきた聖火は白煙を上げ、校門前で引き継がれます。引き継いだ 3 年生の上原さんは自慢の脚力を活かし、一筋の白煙を残し走っていきます。数ある高等学校でも校門前で全校生徒が見守るなか聖火ランナーが走り抜けたという歴史を持つ学校は他にはないと思います。

時は流れ、2002 年 7 月、今度はたくさんの地域の皆さんが校門前で野球部の帰りを待ちわびていました。春の選抜大会でベスト 4 に入った野球部は夏の選手権大会県予選も見事に優勝し、春夏連続の甲子園出場を勝ち取りました。選手を乗せたバスが到着したときの割れんばかりの拍手と歓声は今でも忘れられません。聖火ランナーや野球部がもたらした校門前の歓声や拍手はとりわけ忘れられない歴史の 1 ページです。

このような賑わいを見守っていた大きなガジュマルが今も校門横で存在感を放っています。学校を見守り、生徒を見守り、地域の皆さんを見守り続けたガジュマル、その根は、植え込みからはみ出し、長く広く根を伸ばしており、宜野座高校とともに成長し、長い歴史を感じさせます。

本校の校歌を作詞した初代校長仲里朝章氏は、戦前の軍国主義・皇民化教育への反省から歌詞に「正義」「愛」「誠」「平和の^{わざ}業」「文化の花」「理想の岸」という言葉を入れています。そして、3 番までの歌詞で唯一共通する「いざ^た起て友よ」と合わせて、「いざ意気盛んに立ち上がろう、時は来た、平和を築き、理想の岸へ向かおう」と自分の信じた道を突き進むよう励ましているように感じます。この意気込みは、地域の思いとともに 80 年の長きにわたって本校生徒・卒業生の人生の指針になっていると思われます。